

滋賀短期大学研究紀要
第45号 2020年

絵本の読み聞かせにおける読み手の視線の効果

糸井 嘉¹⁾，浜崎 由紀^{*2)}

1) 平安女学院大学短期大学部保育科，2) 滋賀短期大学幼児教育保育学科

Effects of Reader's Eyes in Reading a Picture Book

Yoshimi ITOI¹⁾，Yuki HAMASAKI²⁾

1)Department of Early Childhood Education, Heian Jogakuin (St.Agnes') College

2)Department of Early Childhood Care and Education, Shiga Junior College

抄録：読み手の視線は絵本の読み聞かせにおいてどのような効果を発揮するのだろうか。筆者らはこれまでに、子どもを対象に実施した絵本の読み聞かせの様子を観察し、読み手の視線が聞き手の態度に影響を与えることを報告してきた。本稿ではまず、新たに観察したデータを加え、これまでの観察結果と比較する。すると、絵本の読み聞かせにおける読み手の視線の影響は、読み手の視線の性質によって様相を変えることが推察された。視線の性質を「共有の視線」と「検分の視線」で区別し、「共有の視線」はさらに「統制的視線」と「共感的視線」とに区別した。「統制的視線」では聞き手に同化の傾向が、「共感的視線」では異化の傾向が、さらに、「検分の視線」では異化の傾向があると考ええる。これらの区別は仮説の範囲のものだが、読み手の介在者としての役割を考えるにあたり、ひとつの重要な手がかりとなるだろう。

キーワード：絵本，読み聞かせ，視線，演劇的要素

1. はじめに

1.1 読み聞かせと人間関係

絵本の読み聞かせの時間は、子どもが言葉や物語に親しむ時間であると同時に、読み手であるおとなと聞き手である子どもとのあいだに絵本や物語を介した心の交流が生まれる時間でもある。直接的な会話に限らず、同じ時間を共有し、同じ物語世界に触れ、共感や心の動きを体感するなかでもたれる緩やかな交流である。奥山が「絵本の良さは、その絵本の楽しさを共に味わう人がいてこそ引き出されるものであり、保育の現場では、それが保育者だったり友だちだったりする」¹⁾、「子どもたちは、人への親しみ、人への愛情、人への信頼感、人とのかかわり方など、人間関係の基盤をつくるきっかけを絵本から与えてもらうことができる」²⁾と述べているように、「読み聞かせ」という行為と

* E-mail: y-hamasaki@sumire.ac.jp

「人間関係」は切り離すことができないものである。保育者養成のためのテキストには、読み聞かせについて次のように書かれているものもある。「絵本の方向ばかりを向いて文字を追うのではなく、時々、子どもがどんな表情や反応をしているのかを確認することが大切である。双方向のコミュニケーションが絵本の読み聞かせの醍醐味でもある」³⁾。ここでは読み聞かせのあいだに子どもに目を向けることの重要性が述べられている。

このように、保育・幼児教育の場において、保育者が子どもたちと向かい合う形で読み聞かせをする場合、読み手である保育者と子どもとの交流はひとつの重要な要素として考えることができる。本稿では、読み手の視線を取りあげ、絵本の読み聞かせにおける交流のなかでどのような効果を発揮するのかを考察する。

なお、本稿では「絵を見せながら、言葉を声に出して読むことによって絵本の内容を伝える行為」として「読み聞かせ」という言葉を使用する。また主に保育の場における子どもの集団への読み聞かせについて述べる。

1.2 先行研究

絵本の読み聞かせについては、方法の解説や実践についての報告を扱ったものが数多く出版されている⁴⁾。しかし、解説書でも読み方の説明に対する根拠は十分に述べられておらず、理論に基づいた方法論が確立されているとは言い難い。読み聞かせの研究としては、聞き手である幼児の反応や、幼児への影響についての研究が多く報告されている⁵⁾一方で、読み手の読み聞かせ中の態度に着目した研究は少ない。近年の研究では、読み手の感情表現や「大げさな演じ分け」の影響を分析した報告があるものの、表現の基準の一般化が難しく、客観性に欠ける部分がある⁶⁾。読み聞かせにおける視線に着目した研究には、奥山らの報告がある⁷⁾。読み聞かせをする保育者と幼児の視線の変容に焦点をあて、相互作用の意義について検討したものである。

筆者らはこれまでに、子どもを対象に実施した絵本の読み聞かせの様子を観察し、読み手の視線が聞き手の態度に影響を与えることを報告してきた⁸⁾。奥山らの研究と異なるのは、聞き手に対する読み手の視線の有無そのものによる違いを検討した点である。分析に際しても、絵本の読み手が聞き手である子どもを「見る」か「見ない」という比較の基準を明確にし、「子どもが絵本から顔を逸らした回数」をカウントするという方法により、客観的な数値が得られるようにした。

4歳児クラスA組、B組で実施した担任教諭による『きょだいな きょだいな』⁹⁾（長谷川摂子、降矢なな、福音館書店）と『三びきのやぎのがらがらどん』¹⁰⁾（マーシャ・ブラウン、瀬田貞二、福音館書店）の読み聞かせでは、読み手が「子どもを見ない」読み方をする方が、「子どもを見る」読み方よりも、子どもは絵本から顔を逸らさないことが明らかとなった。年度を跨ぎ、同じ子ども(5歳児クラス)を対象に、C組で担任教諭による読み聞かせを、D組で保育者養成課程の学生による読み聞かせを実施した。『きょだいな きょだいな』の読み聞かせ中の子どもを観察すると、両クラスともに、

読み手が「子どもを見る」読み方をした方が、子どもは絵本から顔を逸らさないという結果になった。

本稿では、C組の担任教諭による『三びきのやぎのがらがらどん』の読み聞かせの結果を加え、これまでの担任教諭による読み聞かせについて観察の結果を比較し、考察を深める。

1.3 演劇的要素としての読み手の視線

読み聞かせは演劇に似た構造を持つ。演劇は、俳優、戯曲、観客という3つの要素から成り立つとされる¹¹⁾。一方読み聞かせは、読み手、絵本、聞き手という3つの要素から成立すると考えることができる。このような類似性から、絵本の読み聞かせにも演劇理論の援用が有効だと考えられる。ここではブレヒトの演劇理論である「異化と同化」の視点をを用いる¹²⁾。

読み手と聞き手が向かい合う形で読み聞かせにおいて、視線は心の交流を生むひとつの要素であると考えられる。その視線は人の「意思の所在」を表すものとして、演劇においても子どもの発達においても重要な役割を担う。演劇では、俳優は登場人物の意思を示す手段として視線（目線）を使う¹³⁾。子どもの育ちにおいては、共同注意や社会的参照といった発達の姿がコミュニケーション・ツールとしての視線の役割を示している¹⁴⁾。このような読み手の視線は読み聞かせのなかで聞き手に影響を与え、異化、もしくは同化の効果をもたらす。心理学の観点から子どもの演劇鑑賞について研究した乾によると、子どもは児童劇では「自分に近い人物に成り変わって」鑑賞するが、人形劇では「自分自身として感じるのではなくて一定の距離を持って」鑑賞することができるという¹⁵⁾。前者は同化、後者は異化の特徴を示しているといえる。乾自身は異化・同化という言葉を使っていないものの、演劇的表現の鑑賞をする子どもの行動観察を行うにあたり、異化と同化の視点を取り入れる意義はあると考える。

読み手の視線による異化と同化の効果を理解することは、保育の場において、より豊かな読み聞かせの実践につながるだろう。

2. 研究方法

2.1 方法

滋賀県大津市内A幼稚園5歳児クラスの子どもの対象に、担任教諭による読み聞かせを実施し、撮影した映像から子どもの行動分析を行う。

ビデオカメラは保育室内に3台を設置する(図1)。カメラ①は子どもの後方に設置し、読み手を正面から撮影する。カメラ②は読み手の右側に設置し、子どもを斜め前から撮影する。カメラ③は読み手の左側に設置し、子どもを斜め前から撮影する。

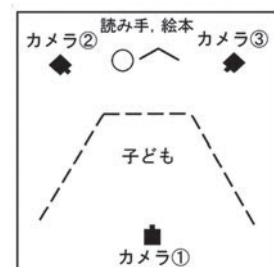


図1 カメラの配置

対象の作品は『三びきのやぎのがらがらどん』である。2017年5月24日実施の1回目は、読み手が子どもを見ながら読み聞かせをし、2017年6月12日の2回目は、子どもを見ないで読み聞かせをした。子どもを見ながらの読み聞かせでは、見開き1ページごとに1回以上、読み手が子どもを見やすいタイミングで見るように指定した。

行動観察では、映像から無作為に11人の子どもを選ぶ。絵本の表紙から裏表紙までを、画面が切り替わる箇所（見返しを含む）を区切りとして18のシーンに分け、各シーンが示される間、俯く、振り返る、友達と言葉を交わす、友達の顔を覗き込むなどといった行動により「子どもが絵本から顔を逸らした回数」をカウントする。

2.2 倫理的配慮

研究に際し、当該幼稚園園長から、対象となる幼児の保護者へ書面にて協力を依頼し、同意を得た。幼稚園園長および読み手である教諭からも研究協力への同意を得た。また、行動観察の段階で対象となる子どもに小文字のアルファベットを割り振り、匿名化することで個人情報保護に配慮した。本研究は滋賀短期大学の研究倫理委員会の審査にて承認を得ている。

3. 結果と考察

3.1 観察結果

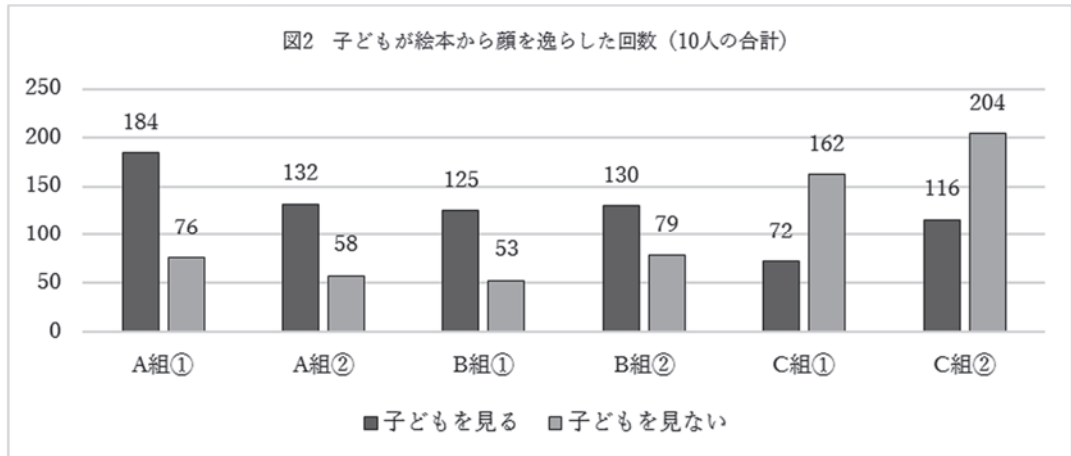
分析の結果は表1の通りである。子どもaから子どもkまで、11人を観察した。表の「a1」は「1回目の読み聞かせにおける子どもaの様子」、「a2」は「2回目の読み聞かせにおける子どもaの様子」を示している。11人の子どもが読み聞かせの間に絵本から顔を逸らした回数を合計すると、読み手が「子どもを見る」場合は131回、「子どもを見ない」場合は224回だった。

表1 読み聞かせ中、子どもが絵本から顔を逸らした回数

		子ども																						
		a1	a2	b1	b2	c1	c2	d1	d2	e1	e2	f1	f2	g1	g2	h1	h2	i1	i2	j1	j2	k1	k2	
場 面 の 区 切 り	1 表紙	1	0	0	1	1	0	0	1	1	1	0	0	1	1	0	0	1	1	1	0	1	1	
	2 見返し、扉	4	0	0	2	1	1	1	0	2	1	0	4	4	2	2	3	4	1	0	0	1	1	
	3 本文1	2	1	1	1	2	1	0	2	1	0	2	2	1	0	0	2	1	1	6	2	1	2	
	4 本文2	1	0	0	1	0	0	0	3	0	0	0	0	0	3	0	1	0	1	1	0	1	0	
	5 本文3	0	1	0	3	1	1	0	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	
	6 本文4	1	0	0	3	1	1	0	0	1	2	0	1	0	1	0	3	0	1	2	2	1	2	
	7 本文5	1	2	0	3	4	0	1	0	1	0	0	1	0	2	0	1	0	2	2	1	2	2	
	8 本文6	1	0	0	4	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0	1	1	
	9 本文7	1	0	0	7	0	0	0	0	2	3	4	2	1	4	0	1	1	1	1	1	0	3	
	10 本文8	1	0	0	6	1	1	2	1	0	3	1	2	1	4	0	4	1	1	0	2	2	3	
	11 本文9	1	2	0	4	4	0	2	0	2	2	0	1	0	1	0	1	1	0	3	4	0	3	
	12 本文10	1	1	0	4	1	0	1	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	
	13 本文11	0	0	0	5	1	0	0	0	0	1	0	0	0	4	0	0	1	1	0	3	0	0	
	14 本文12	0	0	1	4	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3	0	2	0	0	0	1	1	0	
	15 本文13	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0	0	0	
	16 本文14	1	0	0	4	2	0	2	0	2	2	0	4	0	4	0	0	1	3	3	2	2	2	
	17 見返し	1	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	1	1	0	
	18 裏表紙	0	0	0	1	0	1	0	0	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	1	0	1	0	
合計		17	7	2	56	20	6	10	8	15	17	8	20	9	37	2	20	11	16	22	19	15	20	

3.2 これまでの報告との比較

これまでの観察の結果を図2に示した。



A組, B組は4歳児クラスである。A組①, B組①は『きょだいな きょだいな』, A組②, B組②は『三びきのやぎのがらがらどん』の結果を示す(2017年2月24日, 3月7日実施)。C組は5歳児クラスである。C組①は『きょだいな きょだいな』, C組②は『三びきのやぎのがらがらどん』の結果を示す(2017年5月29日, 6月12日実施)。

このうち, A組②, B組②では10人分の観察結果しか得られなかったため, 比較するにあたりすべての結果を10人分の合計数に直した。無作為に選んだ11人の子どものうち, 11番目の子どもの数を除外した。

重要なのは, いずれの場合においても, 読み手に見られているか, 見られていないかによって, 子どもの鑑賞態度(絵本から顔を逸らす回数)に明らかな違いが生じるという点である。最初の報告では, それを単純に「子どもを見る」と異化, 「子どもを見ない」と同化の効果があると考えた。しかしC組では, 読み手が「子どもを見る」と同化, 「子どもを見ない」と異化の効果が見られた。読み手の視線は子どもの鑑賞態度に影響を与えるが, その影響は視線の性質によって様相を変えるのだと考えられる。

3.3 考察—視線の性質と鑑賞態度についての仮説—

聞き手に向けられる読み手の視線の性質と聞き手の態度の関係を次のように考える。

まず, 「統制的視線」と「共感的視線」という言葉で区別する。統制的視線は, 明確なメッセージを伝える目的で使われる。たとえば読み聞かせの最中に友達と喋っている子どもに対して, 「静かに見てほしい」というメッセージを目で訴えかける場合が考えられる。また, 目を合わせることで物語中の登場人物の感情をよりはっきりと伝えようとする場合もこれにあたる。その視線に込められた意

味は、読み手自身によって統制されており明確である。他方、共感的視線は、「聞き手に共感しようとする受容的な視線」である。読み手が自ら意味を発信する能動的な態度としての統制的視線に対し、共感的視線は、聞き手が発信する意味を受け止めようとする受動的な態度の表れであるといえる。

統制的視線は「伝達」、共感的視線は「交流」のための視線であるにとらえると、両者はともにコミュニケーションを目的とした視線であるといえる。これを「共有の視線」とする。これに対し、読み手が子どもの様子を把握するために向ける視線を「検分の視線」とする。

このうち、統制的視線は同化のはたらきと結びつきやすい。鑑賞態度を正すメッセージを込めた視線であれば、聞き手がその意図を察することで、絵を注視させることができる。物語中の特定の感情を伝える視線であれば、その感情が聞き手にも伝播しやすい。このように聞き手の視界や感情を限定することは物語への感情移入を助けるため、同化のはたらきをする。

共感的視線は、異化のはたらきと結びつきやすい。共感的視線が向けられるとき、聞き手にとって読み手は「コミュニケーションの相手」としての他者である。現実世界の他者の存在を意識することは物語から距離を取ることであり、これは異化のはたらきをする。

共有の視線とは異なり、検分の視線を向けるとき、読み手にはコミュニケーションの意図がない。しかし集団での読み聞かせにおいて読み手と聞き手は対面の状態にあるために、読み手と目が合った聞き手はその意図を読み取ろうとする。検分の視線を向けるとき、読み手は「聞き手がその視線をどのように受け取っているか」ということに無頓着であるのに対し、聞き手である子どもは「見られた」ことに対して「なぜ見られたのか」を考える。「他者」として意識される読み手は、聞き手に物語からの距離をとらせ、異化のはたらきをする。

このようにして、同じ「子どもを見る」という行為が異化と同化という異なる影響をおよぼすことになるのである。これらの視線から自由なとき、すなわち、読み手の視線が向けられないとき、聞き手は読み聞かせに参加する態度を自ら決めることができるのだと考える。

A組、B組での結果と、C組での結果が逆転したのは、読み手の視線の性質の違いが影響したためだと推察される。しかし、証明には読み手に焦点を当てた詳細な分析が必要であり、今後の課題である。

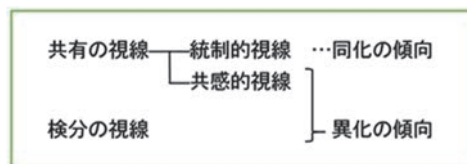


図3 視線の性質と聞き手の態度

4. おわりに

異化と同化は個人の内面の状態を指しており、顔の向きの観察だけで明確にどの子どもが同化したのか、異化されたのかを断定することはできない。ただ、「絵本から顔を逸らさない」という態度は

他の子どもにとって「現実を意識させない」ものであるために、同化を妨げない態度であるといえる。そのため、実際には同化していない子どもがいるにしても、集団としては、絵本から顔を逸らす回数が少ない方が同化の効果がある読み聞かせであるといえることができる。同様に、子どもが絵本から顔を逸らす回数が多いと、それは他の子どもにとって「現実を意識させる」ものであり、異化のはたらきをする態度である。子どもが絵本から顔を逸らす回数が多い場合、異化の効果がある読み聞かせといえる。

異化は効果的にはたらけば、同化ではない、聞き手自身の感情や思考を喚起することができる。しかし過度な異化の効果は、聞き手に物語への興味や集中を失わせてしまう。異化のはたらきが効果的であったか否かを、絵本から顔を逸らした回数だけで判断することはできないため、本稿では触れていない。

今回の考察では、読み聞かせ中の読み手の視線について、その性質が共有なのか検分なのか、統制的なのか共感的なのかを区別し、異化・同化との関係について考えた。これらの区別は仮説の範囲のものだが、読み手の介在者としての役割を考えるにあたり、ひとつの重要な手がかりとなるだろう。今後も検討を重ねたい。

謝辞

読み聞かせの実施にご協力いただいた幼稚園の先生、園児、保護者の皆様に、深く感謝申し上げます。

文献

- 1) 奥山優佳 (2009), 絵本, 児童文化がひらく豊かな保育実践, 保育出版社, p.36
- 2) 同 1) p.37
- 3) 浅木尚実 (2012), 第 8 章 児童文化財 (1), 読み聞かせの基本, 保育者をめざす人の保育内容「言葉」, みらい, p.102
- 4) たとえば, 全日本私立幼稚園連合会公益財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 (2007), 読み方からおススメまで絵本ガイド,
徳永満理 (2013), よくわかる 0〜5 歳児の絵本読み聞かせ, チャイルド本社
- 5) たとえば, 平澤順子 (2018), 保育所 1 歳児クラスの絵本の読み聞かせ場面における自発的身ぶりの検討―手指の動きに焦点を当てて―, 日本女子大学大学院紀要家政学研究科・人間生活学研究科第 24 号, pp.113-122
- 6) 秀真一郎 (2018), 絵本の読み聞かせにおける一考察―感情の有無からくる影響, 吉備国際大学研究紀要(28), pp.1-11

- 松村敦, 森田花, 宇陀則彦 (2016), 絵本の読み聞かせ時の演じ分けが子どもの物語理解と物語の印象に与える影響, 日本教育工学会論文誌 (39) pp.125-128
- 齋藤有 (2015), 幼児期の読み聞かせ場面における大人の関わりに関する研究—幼児の自発的な学びを促す側面への着目—, 風間書房
- 7) 奥山優佳, 松述毅, 香曾我部琢 (2014), クラス活動の絵本の読み聞かせにおける相互作用の意義—保育者と幼児の視線の変容プロセスの分析より—, 東北文教大学・東北文教大学短期大学部紀要 (4) , pp.73-82
- 8) 糸井嘉, 浜崎由紀 (2018), 絵本の読み聞かせにおける介在者の役割に関する考察, 滋賀短期大学研究紀要第43号, pp.117-130
- 浜崎由紀, 糸井嘉 (2018), 絵本の読み聞かせにおける介在者の役割に関する考察(2), 滋賀短期大学研究紀要第44号
- 糸井嘉, 浜崎由紀 (2019), 読み聞かせにおける読み手の視線が聞き手の態度に与える影響についての考察, 保育研究第49号, pp.41-48
- 9) 長谷川摂子, 降矢なな(1994), きょだいなきょだいな, 福音館書店
- 10) マーシャ・ブラウン, 瀬田貞二(1965), 三びきのやぎのがらがらどん, 福音館書店
- 11) 河竹登志夫(1994), 演劇の本質, 日本大百科全書, 小学館, p.732
- 12) ベルトルト・ブレヒト, 千田是也訳 (1962), 今日の世界は演劇によって再現できるか, 白水社
- 13) クリスティアン・ピエ, クリストフ・トリオー, 佐伯隆幸日本語版監修(2009), 演劇学の教科書, 国書刊行会, pp.295-301
- 14) 遠藤利彦, 感情と情意理解の発達, 市川伸一編(2010), 現代の認知心理学 5 発達と学習, 北大路書房, pp.145-150
- 15) いぬいたかし(1979), 人形劇の出発—いぬいたかしの人形激論—, 人形劇の出発, いかだ社, p.181

付記

本稿は一部を日本保育学会第71回大会にて発表している。